

# 筆まかせ～先生からの読書エッセイ～

2019年度  
『筆まかせ』第3号  
3月12日発行

新型コロナウイルスの影響で、突然の休校措置など、戸惑うこともあったでしょうが、こういうときこそ、普段時間のとれないことをするチャンスです。読書もそのうちの一つ。ぜひ手に取ってみてください。感想、お待ちしております。

ピーター・ゴドフリー＝スミス『タコの心身問題～頭足類から考える意識の起源』（みすず書房）

アタマのいい動物、というカラスやイルカなどを思い浮かべるが、何とタコはそれらに匹敵する知性の持ち主だ、というのだ。それ故、実験でタコを扱う際には必ず麻酔を施すことを法律で義務づけている国もあるほどだ。オーストラリアのダイバーの眼を通して観察されたタコの生態は驚くべきもので、人間たちを見分けるだけでなく、嫌いなダイバーにだけ水をかけるなど、好奇心や学習能力に優れている。それを可能にするのが、タコに5億個備わっているニューロン（神経細胞）だ。ヒトでいえば脳細胞に匹敵するこのニューロン、タコの場合は数で言えばイヌと同じレベルであり、しかもその3分の2はアタマでなく8本の足（！）に存在するという。

思考や記憶、認識といった精神活動は、一般的に「頭脳」と結びつけられるが、タコの場合は足が「頭脳」なのだ。この、アタマと足が直接結びついた頭足類と脊椎動物は6億年前に袂を分かち合ったのだが、以来「進化はまったく違う経路で、心(mind)を少なくとも二度つくった」のである。

心臓が三つもあり、血液は緑色。カメレオンのように皮膚の色を変え背景に溶け込むカモフラージュの達人の技にはアメリカの国防省も注目しているらしい。とにかく、ヒトにとってはエイリアン（異星人）に限りなく近いような、この頭足類多足動物の生態に、新年早々私は魅了されたのである。

中村哲・澤地久枝『人は愛するに足り、真心は信ずるに足る アフガンとの約束』（岩波書店）

2019年12月4日、医師中村哲は、アフガニスタン東部の町、ジャララバードで銃撃され、死亡した。彼は、1984年以来、医療活動に加え、用水路を造ることで、この地域の厳しい生存条件の改善に努めてきた。こころざし半ばだった。同時に、彼の著書からは、彼がこの地で生をまっとうするであろうと考えていることも伝わっていた。

ブルカは、ハンセン病にかかっている、町を自由に歩けるもの。現地の医者ならではの見方もこの本にはある。彼は、精神科医として、キャリアをスタートさせた。「患者は悩みをもってくるので、こちらが真剣に聞いているかどうかを敏感に察知するんですね。何か訴えたいことがあって精神科に来るわけですから、それをまともに受け止めてくれるかどうかを観察している。」先生と言われるべき人だったと思います。

山里亮太『天才はあきらめた』（朝日文庫）

2003年、中学生ながらとんでもなく面白い芸人さんが現れたと思った。それが南海キャンディーズ。赤メガネの山ちゃんとビッグなしずちゃん。このおもしろさ…才能以外考えられない…とずっと思ってた大好きなふたり。この本は、そんな山ちゃんの自伝。半生が綴られている。

あの独特で鋭くて、でもどこか優しいつっこみがポンポンあふれ出す頭の中を覗いてみたくて、待ってましたと言わんばかりに即買い。山ちゃんは努力の人だ。そう思った。才能才能と思ってたけど、才能以上の努力の人だった。そして努力するだけ、死ぬほど失敗してた。想いの丈分の失敗。失敗談まとめと言っていいほどの失敗量です。笑えないくらいひどいやつ。でも、失敗の後のごめんね、とありがとう。が人を変えるね。人間ってこうやって変わっていくんだ。と素直に感じた本です。

『渋イケメンの国』（写真集）

『渋イケメンの世界』（写真集）

『渋イケメンの旅』（いずれも三井昌志・写真/著、雷鳥社）



渋イケメン、である。写真家である著者がアジア各地で出会った、渋くて格好いい男たちを記録した異色写真集が話題を呼び、この度、彼らとの邂逅を綴った旅行記が『渋イケメンの旅』として刊行された。百聞は一見に如かず、左の写真をご覧あれ。鋭い眼差し、立ち姿。迸る汗。ジムなどではなく長年の労働によって得た筋肉美。女性にもてようという意識を持ち合わせておらず、着ているものにも無頓着。まさに、「〇ャニーズ系」などと日本で持て囃される系譜の真逆である。「働く男は美しい」というテーマのもと、汗とほこりにまみれて働く男たちの一瞬の輝きを捉えた作品である。自分の価値観を揺るがすためにも、一読（一瞥）あれ。

遠藤周作『沈黙』（新潮文庫）

狐狸庵先生。違いのわかる男。その昔、小説をよく読んでいた頃、遠藤周作はそう呼ばれていた。だから愛読したのも、エッセイやユーモアの多い小説で、遠藤文学の神髄に触れる機会はずいぶん無かった。

その私が、遠藤文学のド真ん中、キリスト教・信仰・神といった重いテーマに挑戦したのは、少しはキリスト教に対する理解が進んだからということもあった。だが、何よりも惹かれたのは、鎖国中に不法入国した神父達が「転び」それでも生きながらえたという事実を知ったからである。日本史を教える者として、ある程度の殉教や隠れキリシタンの知識は持っていたとしても、実態に近い形の授業は出来ていないのが実状である。一時は数万人もの信者がいたとされるキリスト教徒が、いくら幕府の命令だからと言って綺麗さっぱりいなくなるにはそれなりの物語があるということを知ったからでもある。拷問でもなく、殉教でもなく、背教すなわち「転び」をテーマに持ってくるあたりが遠藤文学の凄いところだと思った。その上で、「転び」の論理や日本にキリスト教の神は根付かないとする視点は、キリシタンとして信仰を持ち続けた遠藤周作自身の自らへの問いかけであることは言うまでもないだろう。主人公パードレのロドリゴは、幾多の苦しみにあっても「神の沈黙」に直面する。「転び」の後の「踏むがいい。踏むがいい。お前たちに踏まれるために、私は存在しているのだ」というイエスの言葉は、キリスト教の根本命題であるイエスによる「贖罪」を扱っている。テーマの重さに比例して重厚な文章は、私の慣れ親しんだ遠藤周作では無かったが、この名作に出会えた感動が皆様にももたらされることは言うまでもない。

ブレイディみかこ『ぼくはイエローでホワイトで、ちょっとブルー The Real British Secondary School Days』（新潮社）

優等生で生徒会長まで務めた「ぼく」が選んだのは、なんと元・底辺校に通うことだった。

人種、宗教、貧富、環境、学力の差。さまざまな差を他人と比べて自分のアイデンティティと擦り合わせ、優越感を味わう人たち。

でも「ぼく」はそういった差別を見過ごさず、「楽ばかりしていると無知になるから」と、問題に切り込もうとしていく。差別に気付けない環境を選ぶのも「楽」なのだ！「多様性は、うんざりするほど大変だし、めんどくさいけど、無知を減らすからいいことなんだと母ちゃんは思う」と、母もサポートする。疑問を手放さない2人の姿勢は愉快痛快で、こちらが忍者のようにページをめくっているうちに、差別の現状に対する「無知」を思い知らされる。誰でも知るまでは知らないんだから、無知でも仕方ない、なんて言ってもらえない。

この本を読んで、自分の中の「いつか言ってみたいセリフ集」に新しいセリフが加わりました。

「友だちだから。君は僕の友だちだからだよ。」です。

「自分って何だろう」と悩んでいる人も、「自分のことはもうわかっている」という人も、「ときどき自分がわからなくなる」という人も、この本を読むだけで新しい考えを発見できます。「友だちだから〜」の他にも、素敵な言葉がたくさんありました。読書が宝探しにもなります。

何気ない言葉でも、どのように使うかによって印象が変わります。「大切だ」とか「ありがとう」だとか、本当に伝えたいことは、日本語でも英語でも変わらず、実は2秒あれば伝えられるし、心が動かされます。その事実が、読後なお心に響いていく本でした。

一度お手元に！ぜひ、この本と出合ってあげてください！

伊丹十三『女たちよ！』（新潮文庫）

「テレビ画面にイタリー（イタリア）東部の荒涼たる風景が写し出される。沈鬱な音楽が流れ、アナウンサーも沈んだ暗い声で言う。

『今年はスパゲッティ栽培者たちにとっては悪い年であった。異常な寒さと長期にわたる雨によってスパゲッティの木々は開花期に壊滅的な打撃を被ったのである。』

年離れたイタリーの農夫が木を見あげている。1907年以來といわれる凶作の今年。僅かに実ったスパゲッティの木を見る農夫たちの表情は暗い、……」

作者・伊丹十三さんは、映画監督、商業デザイナーなど様々な分野で活躍した人です。そんな伊丹さんが書いた『女たちよ！』というエッセイですが、これが面白い。タイトルからして挑戦的ですが、その内容もまた然りです。冒頭に紹介したのは、本書に収められている「ハチハチカンタータ」というエッセイです。読んでみると、ついつい「え、スパゲッティって木になるんだっけ？」となります。「イタリー農夫」の暗い表情を想像します。想像力を掻き立てられます。

もちろんこれは、フィクションです。エイプリルフールに英国BBCテレビが行った「<sup>フェイク</sup>偽ニュース」に触発されて伊丹さんが創作したものです。（ちまたで話題の「フェイクニュース」とは違いますよ。それは、人々を不幸にさせるものであり、許されざるものですが、伊丹さんの「偽ニュース」は誰もがクスリと笑ってしまうものです。）

上記で紹介したように、伊丹さんは現実の物事を素材としながら、エッセイを作る達人です。この作品の他にも、独自の視点で物事を「好き」「嫌い」に分けていきます。話題はあまりに多岐に渡っているので本の紹介をしづらいの

ですが、一つ一つのエッセイを読んでいくと「伊丹十三」という人が、なんとなく分かっていきます（魅力的な人物なんですよ、これがまた）。

さて、最後にもう一つ、『女たちよ！』から作品を紹介しましょう。題して「死に至る病」です。

「モテるということが、今や男女の関係の至上のものになってしまった。これは困ったことだよ。若いときにこういうものの考え方に慣れてしまうのは実に危うい。一生、人を愛することのできない人間ができあがってしまう。今一つ注意すべきなのは、モテるという精神構造には「現在」というものがないんだな。はるか未来のかなたに光り輝く理想の女性像みたいなものがあって、この人が今に君を幸せにしてくれるらしい、それまではどうせ仮の生活だ。数でこなそう、というか、きみの視線はデート場所へ向かう電車の中でも、きよろきよろとおちつかぬようだなあ。

若者よ、プレイボーイなんぞに憧れるな！フロムという人が言っている。あれは、男として自信のないやつが、女を数でこなすことによって、自分が男であるということを自分で証明しようとしているにすぎぬのだ！と。」

オグ・マンディーノ『十二番目の天使』（求龍堂）

日本は古から、「言霊さきわの幸う国（言葉によって幸せがもたらされる国）」とされ、「言霊信仰」といって言葉には霊的な力が宿るという信仰がありました。つまり、「良い言葉」には「良いこと」が、「ネガティブな言葉」には「不吉なこと」がついて回るとされていたのです。この「言霊信仰」は現代日本にも、たとえば結婚式では披露宴の終了を「終わり」ではなく「お開き」と表現するなど、「忌み言葉」として残されていることから見とれます。

この『十二番目の天使』はアメリカの小説ですが、ここにも日本に古くから根づいてきた「言霊信仰」に通ずるものが見とれます。しかもこの小説は、「言葉」というものを外に向けて発するものだけに限定せず、自分自身に対して心の中で語りかける言葉にも同じように「魂が宿る」という主題が読み取れるのです。

以下に本文の一部を引用します。

「自分が手にしたいと願う状況を、自分に向かって繰り返し言い続けるだけで、心身の病気を含む、人生で直面するほとんどの問題を克服できると主張し、それを膨大な人々が信じたのだ。」

「自己暗示…実にパワフルな、驚くべき道具です。そのパワー…単純なフレーズが持つ神秘のパワー…それを信じて唱え続けるだけで、誰もが奇跡的なことを成し遂げられるんです。そうやって、潜在意識を前向きな思いや言葉でプログラミングするだけで、私たちの誰もが、人生で奇跡を起こせるんです。」

外に向けて発信する言葉はもちろん、内面化された言葉も時に大きな力を発揮するものです。ネガティブな言葉を自分に浴びせてしまいそうになった時には、それを意識的にポジティブな言葉に変換して自分自身に語りかけ、言い聞かせてみてはどうでしょうか？この『十二番目の天使』に出てくる、野球がチームで一番下手なティモシー・ノーブルという小さな少年は、毎日毎日、自分に向かってこう言い聞かせます。

「毎日、毎日、あらゆる面で、僕はどんどん良くなってる！」

「絶対、絶対、絶対、絶対、絶対、絶対、絶対、あきらめるな！」

そして最後に、ティモシーに奇跡が訪れます。きっと読むと勇気がもらえる、すばらしい小説だと思います。「渴いた心を潤したい！」という人はぜひご一読ください。

## 近藤史恵『サクリフェイス』（新潮文庫）

　　かちり、とシューズがビンディングペダルにはまった。こぎ出す瞬間は、少し宙に浮くような、頼りない感覚。だが、二、三度ペダルを回すだけで消える。ホイールは、歩くよりも軽やかに、ぼくの身体を遠くまで運ぶ。サドルの上に載った尻など、ただの支えだ。緩やかに回すペダルと、ハンドルで、ぼくの身体は自転車と繋がる。この世で最も美しく、効率的な乗り物。最低限の動力で、できるだけ長い距離を走るために、恐ろしく計算され尽くした完璧なマシン。これ以上、足すものもなく、引くものもない。空気を汚すことすらないのだ。自転車の中でも、より速く走るためだけに、ほかのすべての要素をそぎ落としたのが、ロードバイクだ。

　　どうですかこの書き出し。自転車好きにはたまらないでしょ。この小説を読んだら、自転車ロードレースに興味を抱くこと間違いなし。そして毎年春から夏にかけて行われる世界三大サイクルロードレースのジロデイタリア、ツールドフランス、ブエルタエスパーミャを観れば、テレビの前にも、イタリア旅行、フランス旅行、スペイン旅行をしたような気分になれます。自転車ロードレースの世界を舞台に描く、青春ミステリ。自転車をこぐのが気持ちの良い春にうってつけです。

## 門田隆将『敗れても敗れても（東大野球部「百年」の奮戦）』（中央公論新社）

　　以前、開成高校野球部の独創的な取り組みを面白可笑しく綴ったノンフィクション『弱くても勝てます』という本を読んだことがありました。故野村克也監督を彷彿とさせる弱者の論理を、一人ひとりの高校生が主体的に考え具現化する様子が紹介されています。お次は、その東大版か・・・。

　　でも、内容は全然違いました。話は、沖縄戦で島民のために命を投げうった一人の野球部OBについての逸話から始まります。チームが、圧倒的な戦力差が自明である東京六大学リーグの中で勝利を目指し続ける理由は、ここが原点でした。生死をかけた局面からも逃げない、そんな使命感を背負って野球をしているのが東大野球部です。この本を読み、そして神宮球場でその誇り高き負けっぷりを応援しようじゃありませんか。

## 前野隆司『幸せのメカニズム』（講談社）

　　日本人は、GDP（一人当たりの年間所得）に対して、生活満足度が低く、年収1,000万円までは感情的幸福は比例して増大するのに対し、それを超えると、さほど幸福を感じない（変化がない）とされています。それでも、さらに多くの収入を求める傾向（フォーカシング・イリュージョン：幸福になれるという幻想）があるそうです。

　　著者の前野さんは、幸福の持続性という観点から、「地位財」：所得、社会的地位（周囲との比較により満足を得るが持続性が低いもの）、「非地位財」：健康、社会への帰属意識、自由、愛情（他者と相対比較に関係なく幸福が得られ持続性が高いもの）の両方のバランスが大切だと言います。また、因子分析（データを整理して表すためのいくつかの軸を探す分析）を用いて、幸せのための心的要因を調査した結果、4つに分類しました。（「幸せの四葉のクローバー」 1.を除いては、「非地位財」に該当します）

- 「やってみよう」因子：自己実現と成長（オタクを目指せ！）
- 「ありがとう」因子　：つながりと感謝（たくさんではなく多様な友人をつくろう）（人を幸せにすると自分も幸せになる）（お金は人のために使え！）
- 「なんとかなる」因子：前向きと楽観（メタ認知：自分を客観的に見ることの勧め）
- 「あなたらしく！」因子：独立とマイペース

　　人は自分についてよく認識ができていないため、「自分の幸せについて判断を間違ってしまいがち」なのだそうです。前野さんは人の目を気にする性格という認識で自身を検証した結果、いろいろな人と関わりの持てた日に幸せを感じていたということに気づき、積極的に人と関わることを意識するようになったということです。

　　「幸せになるための単純な処方箋はない。一見それとは関係ない何かをすることによって、幸せになれる。・・・一見、幸せとは違う別のアクションをした結果として、まるで突然のご褒美のように、幸せはやってくる。そういう構造になっているのです。」

　　前野さんが特に強調して述べたこの文章に惹かれ、今回はみなさんにもシェアしたいと思いました。自分には向いてないと思っていたことでも、行動し、継続した結果、生きがいになったというような話を一度は聞いたことがあると思います。目の前に与えられた何かを選択するのは自由だとしても、「まずはやってみよう！」ということです。参考にしていただけると幸いです。「あなたは今、幸せですか？」

## 大阪大学ショセキカプロジェクト編『ドーナツの穴だけ残して食べる方法』（日経ビジネス人文庫）

　　どんどんドーナツどーんで行こう！（挨拶）

　　みなさんは、ドーナツは好きですか？

　　ドーナツを食べるとき、「ドーナツの穴」は食べちゃう派でしょうか？　それとも捨てちゃう派でしょうか？　……そんな雑な導入はさておき、今回紹介する本は、大阪大学の研究者たちが「ドーナツの穴だけ残して食べる方法（あるいは、ドーナツそのもの）についてマジメに考察する本です。

　　ある者は工学的な観点から、ドーナツを樹脂などで浸漬させて固形化させてから、レーザー光で周辺部分を削っていく方法を提案する。

　　ある者は数学的な見地から、4次元空間でドーナツを食べれば、「自分がドーナツを食べたと伝えるまで、他人はドーナツの穴を認識し続けている」と展開する。

　　またある者は、哲学者よろしく、「ドーナツを食べると、ドーナツの穴が無くなる、という前提」を疑うべきだとし、「食べればなくなるような、そんなはないドーナツ」はドーナツの風上にも置けないなどと展開する。

　　いやはや、知識の可能性とは、かくも無限大なのです。本書には、いわゆる文系的な視点からの考察も、いわゆる理系的な視点からの考察も、たくさん取り上げられています。自分が将来やりたいことを考える際にも、ステキな示唆を得ることができる良書だと思います。

　　この本を読んで、ドーナツの穴の向こうに見える様々な学問領域を覗き見てくださいネ！